2023年3月26日（日）主日朝礼拝説教

『三本の十字架』井上隆晶牧師
イザヤ書53章1〜5節、ルカ福音書23章32〜43節

❶【キリストの苦しみの神秘】

ピラトはゴルゴダの丘に三本の十字架を立てました。イエス様を中心にして二人の強盗を、一人は右にもう一人は左に十字架につけられました。そのとき、イエス様は父なる神に祈りました。「**父よ、彼らをお赦し下さい。自分が何をしているのか知らないのです。**」（24節）私がこの祈りを初めて聞いたのは、統一協会から逃げ出し、神を裏切った私はもう終わりだと思い、恐れて家の中に隠れていた時でした。しかしこの祈りを聞いた時「自分を殺す者を赦すこの方は本物だ」と思い、勇気が与えられたのです。統一協会では、イエス様は救いに失敗したので十字架に架かったと教えられました。その時の私はまだ十字架の意味も何も分かりませんでしたが、私には失敗とは思えなかったのです。
人々はくじを引いてイエス様の服を分け合い、すべてを奪いました。民衆は立って見つめていました。議員たちはあざ笑い「**他人を救ったのだ。もし神からのメシアで選ばれた者なら、自分を救うがよい。**」（35節）といい、兵士たちも侮辱して「**お前がユダヤ人の王なら、自分を救って見ろ。**」（37節）といい、強盗の一人も「**お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。**」（39節）と罵りました。皆が同じ言葉を言っています。「メシアなら自分を救え！」彼らはイエス様が多くの奇跡を行い、死者をよみがえらせたことを知っています。この言葉には罵りだけでなく、期待を裏切られた怒りと恨みがまじっています。
しかしイエス様は十字架から降りません。奇跡も行いません。もしキリストが十字架で苦しまなかったら、私たちの信仰はまったく異なるものになっていたでしょう。主の苦しみは自発的な苦しみでした。「**誰も私から命を奪い取ることは出来ない。私は自分でそれを捨てる。**」（ヨハネ10：18）といわれたからです。つまり、自らの意志で十字架に架かって苦しみ、自らの意志で死を選んだのです。ユダヤ人たちは苦しみが無くなることが救いだと思い、この世のカルト宗教はそろって苦しみからの解放を約束します。**しかしキリスト教は苦しみからの解放を約束しません。「あなたがたには世で苦難がある。しかし勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。**」（ヨハネ16：33）と主は言われました。

苦しみは本来、神様がお造りになった世界にあってはならないものでした。しかし人間の堕落と共にこの世に「苦しみ」は入ってきました。仏教では「四苦八苦」といいます。生きる、老いる、病める、死ぬ、別離、恨み、…。**苦しみはこの世では無くなりません。堕落したこの世界では不可能です。そこで神様は人間を奇跡や力によって救うのではなく、苦しみを連帯するという方法によって人を救お**

うとされたのです。つまりキリスト神が、自ら「人間の苦しみ」を連帯することによって、苦しみを「神の苦しみ」へと変容させたのです。そこでパウロは次のように語ります。「主に結ばれているならば自分たちの労苦が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているのです。」（Ⅰコリント 15：58）

●先日教会一致祈祷会で、ミャンマー出身のマキン・サンサン・アウン先生（高槻バプテスト教会牧師）のお話を聞いてきました。1988 年のクーデターの時に姉を頼り来日し、在日ミャンマー人の仲間と集会を始めます。その後、日本語を勉強して神学校を出て牧師になりました。2021 年の軍事クーデターで、多くの人が殺され、難民が生まれました。ミャンマーを覚えて、支援団体「アトゥトゥミャンマー」を立ち上げ、毎週金曜日夜 9 時に集まっては「祈り会」をもってきました。クーデターがすぐに終わればと思っていましたが、祈り会は 110 回にもなりました。いくら祈っても神はきかれないのか、命を守ってくれないのか？と絶望的になることもあったといいます。ある時、詩編 56：9 の「あなたは私の嘆きを数えられたはずです。あなたの記録にそれが載っているではありませんか。あなたの皮袋に私の涙を蓄えてください。」という言葉を読んだ時、「そうじゃあない。神は忘れたことはない。共にいると約束をして下さった。この苦難の中に共にいて下さるのだ」と思い、希望が出たそうです。

この世では苦しみはなくなりません。でもイエス様も一緒に苦しんでくださいます。そこに私たちは慰めと勇気をいただくことができるのです。

❷【右と左の強盗の運命は分かれてしまった。愛に気づくかどうかだけ。】

キリストが人間の苦しみを共に負い、共に苦しんでおられる姿を見て右の強盗は変わりました。「お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は自分のやったことの報いをうけているのだから当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」（40～41 節）人間は自分の罪で苦しみます。自業自得です。でもキリストはそうではありません。苦しみに与らない方が、苦しんでいます。しかもその人間の罪を赦しておられるのです。ここに神の愛が完全に現れました。この愛に強盗は気づいたのです。右の強盗はこう祈りました。「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、私を思い出して下さい」（42 節）。その時、イエス様は強盗に「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園（天国、神の国）にいる」（43 節）といわれました。

●昔の祈祷文にはこう書かれています。「あなたの十字架は二人の盗賊の間にあって義の秤となりました。一人はそしりの罪の重さによって地獄に落とされ、一人は罪から解かれ、軽く上げられて、キリスト神よ、光栄があなたにありますようにと讃め揚げることを悟りました。」

すべての人間はイエス様を真ん中にして右と左に分かれてしまうことを聖書は教

えています。一方はイエス様と共に天国に入り、一方は地獄にとどまりました。全ての人が苦しみます。でもその苦しみの中で人は分かれるのです。一方は自分の罪を知り、それでも愛して下さる神の愛を知ります。もう一方は、同じ苦しみを受けても、神と人の愛を信じられず、不幸を神と人のせいにして、恨みの中に閉じこもるのです。人は自分で天国に入り、自分で地獄にとどまるのです。神が人を地獄に落とすのではありません。地獄でも神の愛は変わらないからです。ただ地獄にいる人はその愛を信じようとしないのです。

❸【神の愛の勝利】

神の力は、世界の創造や奇跡よりも、むしろ愛によって、ご自身を惜しみなく与えたことに現れます。ドストエフスキーは「カラマーゾフの兄弟」という小説を書きました。その中に出てくるゾシマ長老はこういっています。「愛によるへりくだりは恐ろしい力を持っている。それは何ものよりも強い。」

●カリストス・ウエア主教はこう書いています。「何が成し遂げられたのか。受難する愛の勝利、愛の憎しみへの勝利に他ならない。キリストは自分の者たちを極限まで愛し抜いた。愛ゆえに世界を創造し、愛ゆえに人としてこの世界に生まれ、愛ゆえに私たちの損なわれた人間性をご自身のものとして担った。愛ゆえに私たちの苦難を分かち合った。愛ゆえにご自身を犠牲としてささげ、ゲッセマネの園で進んで苦難を受けることを決意した。…十字架の時、闇の力はイエスを攻撃して荒れ狂う。しかしそれはイエスの被造物への憐れみを憎しみに変えることは出来ない。愛はそんな妨害をはねのけて愛そのものであり続ける。主の愛は最も困難な地点で試みられるが、打ち倒されない。『光は闇の中に輝いている、そして闇はこれに勝たなかった。』」

これを読んだ時、神キリストの愛ってすごいなあ～と思いました。キリストは「愛そのものであり続ける」。こんな当たり前のことを信じていなかったのです。**神の愛にはかなわないと思いました。このキリストの愛に負けよう、キリストの愛に愛されるままにしよう、右の強盗のように肩の力を抜こう、愛されるままになろうと思いました。**

モンテスキューは「**真に偉大なものは人間の上にあるのではない。人間と共にある。**」といいました。キリストの偉大さは、遥か天にいまして畏れ多いことではなく、私たちと共におられる神として、世の終わりまで私たちと苦しみを共にされることにあります。だから恐れよ、去りなさい。あなたが何をしても、神はあなたを愛しています。不信仰よ、去りなさい。神はあなたと共におられます。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。命であるキリストがどこまでもわれわれと共におられるのです。キリストがあなたを愛しているのです。死に落ちた私たちを生かし、天に上げるために、この方は十字架に登りました。あなたの苦しみを分かち合うために、この方の両手、両足は釘打たれ、わき腹は刺され、頭には茨の冠を

かぶせられ、背にはむち打ちを受けて下さいました。あなたを癒す為です。神があなたのために苦しんでおられます。苦しみの神秘です。何と恐れ多い事でしょう。この神の愛に気づく者となりましょう。